

第20回卒業生を迎え、 第1回ホームカミングデイを開催



10月17日、第1回ホームカミングデイを行いました。第20回卒業生が還暦を迎えるのを機に、同窓生に母校に帰る日、ホームカミングデイ（還暦同窓会）を学校、同窓会、第20回卒業生実行委員会の三者の共催で行なおうと5月から準備してきました。

当日は173名もの卒業生（卒業生565人）と、当時の高Ⅲ担任を始め15人の先生方に参加いただきました。新校舎のセンテナリホールで全体会を行ない、第20回卒業生は入学時が学園60周年の年であったので、学園60周年記念映画「淑徳」を上映し、在学中の高校生活や学校の雰囲気懐かしみ、楽しんでいました。

その後、新しく出来たカフェテリア（生徒用食堂）で1組から10組までクラスごとに分かれ、担任や授業担当の先生と一緒に42年前の高校生に戻って旧交を温め、近況を語り合い、携帯やメールアドレスの交換等、あつという間の2時間を楽しみました。

ホームカミングデイの実施と大成功には同窓会はもちろん、第20回卒業生実行委員会の方々の並々なご努力がありました。厚くお礼を申し上げます。第2回、第3回の



センテナリホールでの全体会（右も）



ホームカミングデイはすでに実行委員会ができていて聞いています。大切な行事として長く続けていきたいと思っています。



受付にて



カフェテリアで恩師を囲んで懇談（右も）



第3回オープンキャンパスに 1,657人が来場



公募制推薦入試「小論文対策講座」
（星が丘キャンパス）



入試相談コーナー（長久手キャンパス）



学食体験（星が丘キャンパス）

10月24日、第3回オープンキャンパスを開催しました。愛知淑徳大学を希望する受験生を対象に、本学をより理解してもらうために年3回開催しています。今回は、長久手キャンパスと星が丘キャンパスへ、合わせて1,657人（昨年比+640人）の来場者がありました（保護者数は含めず）。

当日は、東海4県はもちろん、全国各地から来場いただきました。また、高校1、2年生や保護者の方の姿も多く見受けられ、本学への関心の高さが伺えました。

教員と相談できる本年度最後の機会ということもあり、学科専攻相談コーナーや入試相談コーナーには、入試を目前に控えた

受験生による長い列ができました。また、全体説明会では各学科専攻の内容や入試ポイントをつかもうと、朝早くから多くの受験生が詰めかけ、真剣に聞き入っていました。他にも人間情報学部や心理学部、スポーツ健康医科学科が実施した「体験コーナー」に多くの参加者が集まっていました。

さらに、今回初の試みとして、星が丘キャンパスにて公募制推薦入試の『小論文対策講座』を実施しました。昨年同様に第2回オープンキャンパスで実施した『公募制推薦入試基礎学力試験対策講座（国語・英語）』の模様も両キャンパスでDVD上映し、間近に迫った公募制推薦入試（基礎学力重視型）で合格を狙う受験生にとっては、とても有意義な機会となったようので参加者からは満足したという声が多く寄せられました。

合気道部が創立15周年 記念行事演武会・祝賀会を開催



演武会のおとには、名東区のサンプラザ シーズンズで祝賀会が催され、大勢の関係者が参加して、盛大に行われました。15代主将の今枝洋平さんは「多くの方からお祝いの言葉や、祝電、お花などをいただき、創立15年という歴史が生み出した人と人とのつながりを深く感じ、合気道部のますますの発展のため、日々精進していかなくてはならないことを痛感しました」と語ってくれました。

合気道部は同好会時代から数えて創立15周年という節目を迎え、10月25日に「創立15周年記念行事演武会・祝賀会」を開催しました。

長久手キャンパス体育館で行われた演武会には、学内関係者やOG・OB、また普段交流の深い大学や道場の関係者など、全国各地より総勢200人を超える参加者を迎え、厳粛な雰囲気の中、まず初めに本学合気道部の演武、そして他大学や高等学校14校による賛助演武が繰り広げられ、最後は日頃指導を受けている栗林孝典師範の力強い演武で締めくくられました。賛助演武には東京外国語大学、明治学院大学、大東文化大学など関東方面からの大学の参加もあり、本学合気道部の全国規模での活躍が伺えるものでした。

合気道部は同好会時代から数えて創立15周年という節目を迎え、10月25日に「創立15周年記念行事演武会・祝賀会」を開催しました。





現代社会学部の深谷美海さんが バトントワリングインターナショナルカップで2種目入賞



現代社会学部3年の深谷美海さんが、昨年8月にオーストラリア・シドニーで開催された第5回WBTフインターナショナルカップのトゥーバトン・アダルト部門4位、スリーバトン・アダルト部門5位に入賞しました。今回で3年連続での世界大会出場となりましたが、今回は最上レベルでの参加の中、2種目入賞という素晴らしい成績を残しました。

深谷さんは現在、ナゴヤゴールデンワラースに所属する傍ら、大学1年生の時に立ち上げた愛知淑徳バトン研究会(同好会)でも活動を行っています。深谷さんは全国レベルで活躍できる部活に入部したいと思い、愛知淑徳中学を受験。中高バトン部に在籍している6年間、「夢は叶える為にある」「努力は裏切らない」の言葉に支えられながら練習に励んできました。そして、世界の舞台に立てるようになった今でも愛知淑徳バトン部での活動が深谷さんの原点であり、この言葉を忘れずに日々努力しているそうです。

「今後は、指導者を目指し、再来年フロリダで開催されるインターナショナルカップで念願のメダルを持って帰り、日ごろの感謝の気持ちを伝えたい」と力強く抱負を語ってくれました。

中学校入試説明会に 1,800人が来校



校長あいさつ



中央棟大アリーナでの説明会



校舎を見学する児童と保護者



入試相談

中学校入試説明会を11月28日に実施しました。例年多くの参加者があるため、昨年より会場を中央棟大アリーナに移し、また、昨年度からは午前を小学校6年生対象、午後を5年生以下対象として、内容を若干変えて2回に分けて開催しています。

当日は朝から快晴、11月下旬とは思えない暖かさでした。午前は入試を間近に控えた6年生が対象ということもあり、朝早くから多くの受験生や父母の列が続きました。

最初に中学吹奏楽部が数名での重奏を披露して校長あいさつ、卒業生がレポーターとして学校を紹介する形の新しいビデオ「わたしの淑徳」を上映、その後、副校長より22年度の入試出願についての説明と21年度入試問題の解説を行いました。

本番の入試も2ヶ月後に迫り、親子共々真剣な眼差しで聞き入る姿が多く見られました。全体会終了後、希望者対象に行った入試相談も長い列ができ、改めて中学受験に

対する熱気と期待を感じました。午後は5年生以下が対象のため、参加者の雰囲気としては若干余裕も感じられましたが、中高キャンパスやクラブ見学と合わせて、日頃の学校生活の一端も分かっていたので、はないかと思えます。午前午後合わせた参加者総数は約1,800人でした。

姉妹校のセント・キャサリンス 高校から教員と生徒が来日



12月7日と8日、姉妹校であるオーストラリアのセント・キャサリンス高校の教師と生徒が本校を訪問しました。

同校はメルボルン市の閑静な住宅地ソーラックにある、幼稚園から高校までの女子学校です。本校とのつながりは長く、昭和53年に「日本文化研修旅行団」として来日したのをきっかけに交流がスタート。当初は少人数による短期の交換留学でしたが、次第に研修団としてお互いの学校を訪問するようになりました。

今回は教員2人、生徒14人の来日で、7日の1限目に歓迎式を行いました。昼には、昨年度に本校からオーストラリア研修団に参加した14人の生徒と教員を交え、楽しく昼食会を持ちました。その後、セント・キャサリンス高校の生徒たちは2年と3年の授業に参加しました。

8日には日本の伝統文化である茶道と生け花を体験。慣れない正座に苦労したり、和菓子の「あん」を食べられない生徒もいました。午後の授業では、本校生徒が英語、姉妹

校生徒が日本語で話す少人数での交流を行いました。本校の生徒にとってもいい経験になったようです。

セント・キャサリンス高校の教員、生徒は広島、名古屋、京都、東京に滞在し、15日に帰国しました。



1日目。中央棟大アリーナでの歓迎式



1日目午後。習字に挑戦する姉妹校の生徒たち



2日目。本校生徒と英語で交流



2日目。茶道を体験

現代社会学部都市環境デザインコースが学内ギャラリーで展覧会を相次ぎ開催



会場には、様々に展開された「丸」の作品が展示されました。

また、10月7日には、渡部氏を講師にギャラリートークを開催。学生時代に長く海外で過ごされた経験、仕事をいつたん離れても自分の作家性を追った再留学の経験を伺い、常にチャレンジされている姿勢に触れることができました。

「丸のつながり」 —渡部まさみのテキスタイルデザイン—展

■9/28～10/15 都市環境デザインコース・ミニギャラリー

テキスタイルデザイナー、渡部まさみ氏（シンコー株式会社所属）は、普段はソファなどのインテリア用品にどのような布地使いをするか提案する仕事をされていますが、2000年に1年間の休暇を取り、かつての留学先であったスイス・チューリッヒへ渡り、テキスタイルデザインと向き合う時間を過ごされました。

テキスタイルは、直交する縦糸と横糸の関係でさまざまな模様が仕上がる、原理としてはシンプルですが、糸の素材は何を選ぶか、色をどう組み合わせるか、表現の多様性が魅力です。渡部氏のモチーフは「丸」であり、

「東海圏の建築系研究室プロジェクト展」第1弾& 「空間設計後期課題保存作品展[空間設計Ⅱ・Ⅳ]」

■10/19～11/6 都市環境デザインコース・ミニギャラリー

「東海圏の建築系研究室プロジェクト展」の第一弾として、名古屋大学立大学の伊藤恭行研究室と久野紀光研究室より、研究室内で手掛けた実施設計コンへの応募作品をお借りし展示しました。

伊藤研究室からは「ボールド歴史博物館」と「浅草文化観光センター」の設計案、久野研究室からは「那須100年コミュニティコア施設」の設計案が展示されました。どの作品も実施設計を勝ち取ろうとするリアルな提案であり、緻密に表現されたプレゼンテーションボードと模型には大変迫力がありました。

11月4日にはご本人たちをお招きしてギャラリートークを併催。アイデアをかたちにするまでの過程を、スライドを用いて具体的にお話しいただき、同じく建築を学ぶ者にとって、本学の学生にも刺激があったことと思います。また、展示期間中には、本学学生の設計課題の優秀作品を展示する「後期設計課題保存作品展[空間設計Ⅱ・Ⅳ]」を開催しました。先輩の仕事が後輩の参考となる有意義な機会となりました。



「2009年度前期プロジェクトⅡa& 高橋敏郎ゼミ『あかり』展」

■11/10～26 都市環境デザインコース・ミニギャラリー

都市環境デザインコースの学生が、今年度前期科目で提出した作品の展示会を開催しました。「都市環境デザインプロジェクトⅡa」担当・齋藤基之からは「写真による、街空間の記述—伏見界隈—」と題した写真展、高橋敏郎ゼミからは「あかり」の作品が展示されました。

名古屋伏見界隈を撮影した写真展は、被写体として「街」を捉えるものです。問屋街の横相、街で働く人々の様子、車の往来、無人の街並など、学生たちの各々の目線で「伏見」が切り取られました。

「あかり展」では、第22回コイズミ国際学生照明デザインコンペ「あかりのありか」を求めて、地球を大事にする「あかり」の入賞作品2点と、岐阜県美濃市の特産である美濃和紙を使用した「美濃和紙あかりアート展」への出展作品が展示されました。

2つの展覧会に共通するのは「学外への挑戦」の記録であったということです。大学の授業だから創作するのではなく、よりよい表現を追求したい、批評してもらう機会を得たい、という積極的な姿勢であったと思います。



「栗原健太郎+岩月美穂 Studio velocity展」

■11/30～12/18 都市環境デザインコース・ミニギャラリー

現在、活躍中の建築家の作品をお借りする企画展を開催しました。栗原氏と岩月氏はともに、大学院在籍時から多数の設計競技で入選を果たしており、大学院修了後は、建築界でも注目の石上純也建築設計事務所に入社。国内外のプロジェクトを手掛けた後、2006年からは岡崎市を拠点に「一級建築士事務所『Studio velocity』」を設立されました。独立後も受賞歴は絶えず、建築設計だけでなくインスタレーションにも大変積極的に取り組まれています。

展示会場の長い壁面には109枚の小さなパネルが均一に展示され、彼らの手掛けるプロジェクトが、写真、図面、ドローイングで示されました。お二人にとって、建築とは建物の設計に限らず、敷地全体の草花から家具小物にまで及びます。彼らの手から創作された模型やドローイング、何度もスタディが為された空間は、ハードな建築のあり方とはまるで異なる、柔らかく穏やかな空気が漂い、不思議と温もりが伝わってきます。会期中に開催したギャラリートークも大盛況でした。建築の新たな可能性を感じた気がしてなりません。

